

法令の改訂に伴う保育内容「人間関係」の研究動向 Research Trends in the Contents of Childcare "Human Relations" in Accordance with the Revision of Laws and Regulations

高畑 芳美

TAKAHATA Yoshimi

要旨

保育者養成校で保育内容「人間関係」の担当する者として、幼稚園教育要領の改訂、及び保育所保育指針等 2 法令の改定に伴う新しい養成カリキュラムに準拠した授業改善を行うための視座を得ることが目的である。方法として、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター (CiNii) から、改訂前後の国内の研究論文を探索し、テキストマイニングによる分析を試みた。結果、領域「人間関係」に改訂された前後は実際の子どもや保育現場での研究が多く、その後、養成校でのカリキュラムや指導法の研究へと移っていった。論文タイトルの抽出語間の共起ネットワークで関連を見てみると、特に 2017 年改訂以後、それまでの教育要領等との比較、3 法令の比較・分析が中心に研究され、近年は、保育者養成校での実践的な学生の理解を促すための試みの研究が増加していることが分かった。

Abstract

The current study seeks the perspective of leaders of “human relations” classes at nursery school teacher training schools regarding how lessons that are part of preparation for the new school curriculum may be improved, against the backdrop of the revision of both the National Curriculum Standard for Kindergartens and two laws and regulations, including the Nursery School and Childcare Guidelines, through a text mining analysis of academic research conducted in Japan before and after the guidelines were amended. This study leveraged texts sourced from the Japanese scholarly and academic information navigator CiNii (Citation Information by the National Institute of Informatics), finding that in the periods before and after the revisions in the “human relations” numerous studies examined the real experiences of children, and also that a great deal of research was carried out on-site at nursery schools. However, later trends showed a transition to a greater number of studies of both curricula and instruction methods at training schools. Examining the links between the co-occurrence networks of words extracted from article titles showed that, particularly after the revisions of 2017, studies centered on comparisons between the new guidelines and those that had gone before them, as well as comparisons between and analyses of the three laws and regulations. In recent years, the number of studies investigating attempts to promote understanding among practical students at childcare training schools was seen to have increased.

キーワード : 保育内容「人間関係」, CiNii, テキストマイニング

Key Words : the contents of childcare "human relations", CiNii, text-mining

はじめに

「人は人によって人となる」というように、幼児教育は、親との生活の原点から始まり、保育者、友達、地域社会へと広がる。その意味で保育内容「人間関係」は、すべての保育内容の「領域」の基礎となるものである。

2017年の幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3つの改訂（改定）を受け、保育者養成校においても、新しい法令に準拠した保育実践のできる保育者の養成を求められている。そこで、これまでの保育内容「人間関係」に関する国内の研究を概括する。研究の方向性と課題を明確にしたうえで、モデルカリキュラムを踏まえたより実践力のある保育者養成を目指すことは、授業改善につながるだろう。これまでの保育内容「人間関係」の研究の動向を整理することで、有用な視座を得られるものと考えられる。

領域「人間関係」は、1989年（平成元）年版の幼稚園教育要領で新たに設定された領域である。それまでは、人との関わりに関する内容は、「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の6つの領域のうち、主に領域「社会」で扱われていた。「社会」という領域名は、小学校教育の教科「社会」との混同を招きやすいこと、いじめの増加が指摘されてきたこと等から、「人間関係」となり、その後の社会状況の変化が内容に反映された新たな観点が加えられている。2008年の改訂（改定）では、自信・自己肯定感、共同意識、規範意識を育むことも重視された。2017年の改訂（改定）には、「ねらい」(2)に「工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、」が加えられた。これは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(3) 協働性」に対応したもので、友達と工夫したり、協力したりすることが強調されている。

先行研究の中で、保育内容「人間関係」に関する研究動向を調査したものは、永野（2007）が、1989年以降の日本保育学会で発表された保育内容「人間関係」について調査したもの以外に見当たらない。この調査では、学会での口頭発表を中心にしたため、発表者は研究者による発表が半数以上ではあるが、幼稚園や保育所などの保育者による発表、また共同研究が残りの大半を占め、保育現場での事例をもとにした研究が多い。

本研究では、保育内容「環境」の研究動向を俯瞰した畑野・大竹（2020）と同様の方法で、保育内容「人間関係」についての研究動向を検討する。畑野は、同様の手法で、「保育内容」（2019a）、「保育実習指導」（2019b）、子どもの「運動遊び」に関する研究動向（2018）を分析し、各領域の動向を把握している。

研究目的

したがって、本研究では、以上のような先行研究を元に保育内容「人間関係」の研究動向を俯瞰することで、現在の保育内容「人間関係」の概要がつかめると考えられる。そこから、新法令に伴う保育者養成校の指導法についての視座を得ることを目的とする。

方法

国立情報学研究所（NII）のCiNii(NII 学術情報ナビゲータ)を使用し、1998年から2020年までに発行され、CiNiiに掲載された文献で、保育内容「人間関係」のキーワードをもとに、フリーワードで探索した結果、調査対象文献を152件抽出した。その中で有効な調査対象文献は、114件となった。これらのデータベースから、論文タイトルと共に執筆者氏名、出典、執筆年が探索可能であるため、それらについても収集した。

抽出文献をもとに、学会出版物（日本学術会議において学術研究団体として登録されている学会が発行する学会出版物に所収されている文献、一部一般的な学会発表要旨を含む）、大学紀要（大学が発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献）、その他（日本幼稚園協会、全国保育士養成協議会、出版社が発行する研究雑誌などに掲載されている文献等）に整理した。

また、1998年から2020年（10月1日）までに発行され掲載された文献について、経年の変化を概括するため、幼稚園教育要領の改訂時期の区切り（1989年、1998年、2008年、2017年）を参考に、先行実施・改訂間の年数を考慮し、本研究では便宜上次の3つに区分（1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2020年）し整理した。

分析は、上記に抽出した論文タイトルを、KHCoder3 リファレンス（樋口,2018）を用いて分析を進めた。なお、分析方法は、樋口（2014）の手続きに従った。

結果と考察

（1）保育内容「人間関係」に関する文献のCiNii掲載状況

2020年10月1日現在、抽出文献は152件であった。これらの文献の中で、論文名以外の語句を有する文献も混じっていたため、それらの文献については、1つ1つ確認し、最終的に114件の抽出論文に対して二次資料を作成した。表1は、それらの抽出論文を出典別に件数及びパーセンテージで示したものである。

表1 保育内容「人間関係」に関する論文の
出典別件数及びパーセンテージ

論文種別	件数	%
学会	2	2
紀要	110	96
その他	2	2
総計	114	—

表2 保育内容「人間関係」に関する論文の
年代別件数及びパーセンテージ

年代	件数	%
1998年～2007年	11	10
2008年～2016年	24	21
2017年～2020年	79	69
総計	114	—

論文の出典をみると、大学が発行する研究紀要が110件で、全体の96%と最も多く、ほとんどと言ってよい数である。

また、表2に示したように、2017年～2020年が79件で全体の69%を占めており、最も多い。2008年～2016年が24件で21%、1998年～2007年は11件で10%となっている。1998年～2007年から2008年～2016年は2倍近く件数が増加しており、2017年～2020年では、約3年間で、全体の7割近くが出現していると言える。

以上の結果から、保育内容「人間関係」における年次変化については、大学紀要における増加の傾向が顕著で、特に2017年の3法令の改訂（改定）前後から急増していると言える。

（2）保育内容「人間関係」に関する論文タイトルの形態素解析

保育内容「人間関係」に関する論文の研究の動向を明らかにするために、論文タイトルにおいてどのような語句が選択される傾向にあるのか、計量的分析を試みた。その結果、保育内容「人間関係」に関する論文タイトルからの抽出語総数は、2944語であった。

表3は、抽出語の中でも、文献のタイトルに使用されている名詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して、出現回数頻度順に示した。

表3 文献のタイトルに使用されている出現回数5以上の名詞句

名詞	頻度	名詞	頻度
人間	122	中心	8
内容	109	要領	7
領域	27	モデル	6
学生	20	観点	6
幼児	17	小学校	6
子ども	15	遊び	6
環境	13	科目	5
課程	12	言葉	5
幼稚園	12	指針	5
課題	8	対象	5

最も多かった抽出語は、「人間」で122であり、続いて、「内容」109、「領域」27、「学生」20、「幼児」17、「子ども」15、「環境」13、「課程」・「幼稚園」12、「課題」・「中心」8が上位10語である。

次に、抽出語の中でも、サ変名詞句についてみる。サ変名詞句は、動作性名詞で、論文のタイトルに使用される場合には、「保育する」「関係する」のように研究テーマの活動内容や調査、分析方法を意味する語として使用される場合が多い。そこで、表4は、このサ変名詞のうち、出現回数5以上の抽出語を頻度順に示した。

表4 文献のタイトルに使用されている出現回数5以上のサ変名詞句

名詞	頻度	名詞	頻度
保育	167	理解	10
関係	126	活動	9
教育	25	実習	9
考察	25	関連	8
指導	25	支援	8
授業	24	経験	7
養成	23	調査	7
研究	18	連携	7
実践	17	着目	6
検討	12	生活	5
分析	12	表現	5

最も多い抽出語は、「保育」で167、続いて「関係」126、「教育」・「考察」・「指導」25、「授業」24、「養成」23、「研究」18、「検討」・「分析」12が、上位10語となっている。

これらを代表とする抽出語同士の結びつき、すなわち語の出現パターンの似通った語（共起の程度が強い語）

を探るために、集計単位を文、語の最小出現率を2、描画数を60に設定した共起ネットワークを作成した(図1)。図1において、円が大きいほどその語の出現回数が多く、線が太いほど共起の程度が強く、円の色が黒に近いほど媒介中心性が高いことを示した。

媒介中心性に注目すると、「授業」「学生」「養成」が多くの語を介在していることが明らかとなった。保育内容「人間関係」が保育者養成課程の「授業」において重視されている。特に、「学生」「実習」「経験」のまともりは、「人間関係」の授業において、学生自身の日常の経験や実習との関連で捉えやすいものであるといえよう。「関連」するものとして、「生活」「小学校」「活動」の語があり、教科の「生活」や「特別活動」につながるもので、「連携」を意識したものとなっている。次に、「幼稚園」「教育」「要領」「指針」の語のまともりは、法令に順守した内容を意識したものであることがわかる。

次に、保育内容「人間関係」に関する年代と共起関係を設定して得られた共起ネットワークを示す(図2)。図2において、「保育」「内容」「関係」「人間」は、抽出した論文タイトルであり、どの年代とも共有されているのは当然であるが、「授業」「養成」「指導」は、どの年代においても中心に研究されている内容であることがわかる。ただし、時代とともに、研究内容の傾向は変化してきている。1998年～2007年には、「幼児」「支援」「幼稚園」「課題」「調査」との抽出語が見られ、幼稚園現場の幼児の姿との関連で、保育内容「人間関係」の指導や支援

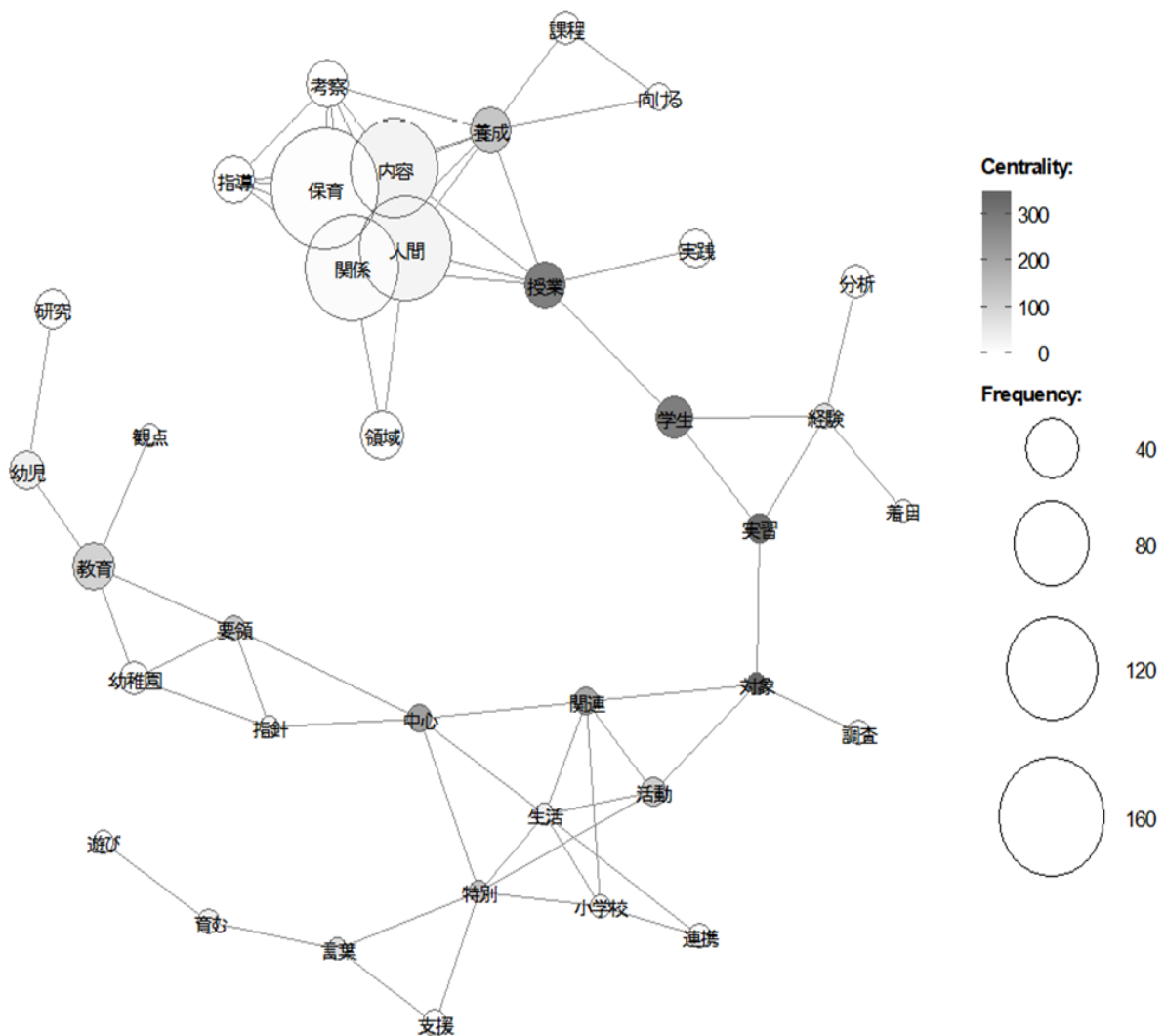


図1 保育内容「人間関係」の論文タイトルの共起ネットワーク

の課題を調査しようとしていることがうかがえる。2008年～2016年は、「子ども」「実践」「活動」「経験」と関連づけ、より実践的な活動から子どもに経験させたいモデルを形成しようというあらわれである。これは、2008年度版の改訂で、「人間関係」の内容項目が、「(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちを持つ」や「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする」などより具体的な項目が追加されたこととの関連が深いと考えられる。2017年～2020年は、「幼稚園教育要領」の改訂と同時に「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の見直しがされ、共通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連が重視されるようになってきている。「領域」としての人間関係を「考察」し、養成校では、そのことを「学生」に「指導」していくためのさまざまな「検討」が研究の中心課題となっているととらえることができる。この時期の研究が、期間が短いにもかかわらず、研究論文の数が最多であることから、この傾向がより顕著であると言える。

以上のように、保育内容「人間関係」に関する論文の CiNi 掲載状況と研究動向、研究論文タイトルから抽出した語の関連から、全体的な研究傾向を明らかにしてきた。ここからは、さらに年代ごとに抽出された語の共通性に注目し、特徴的と思われる文献をあげ、研究の動向を考察する。

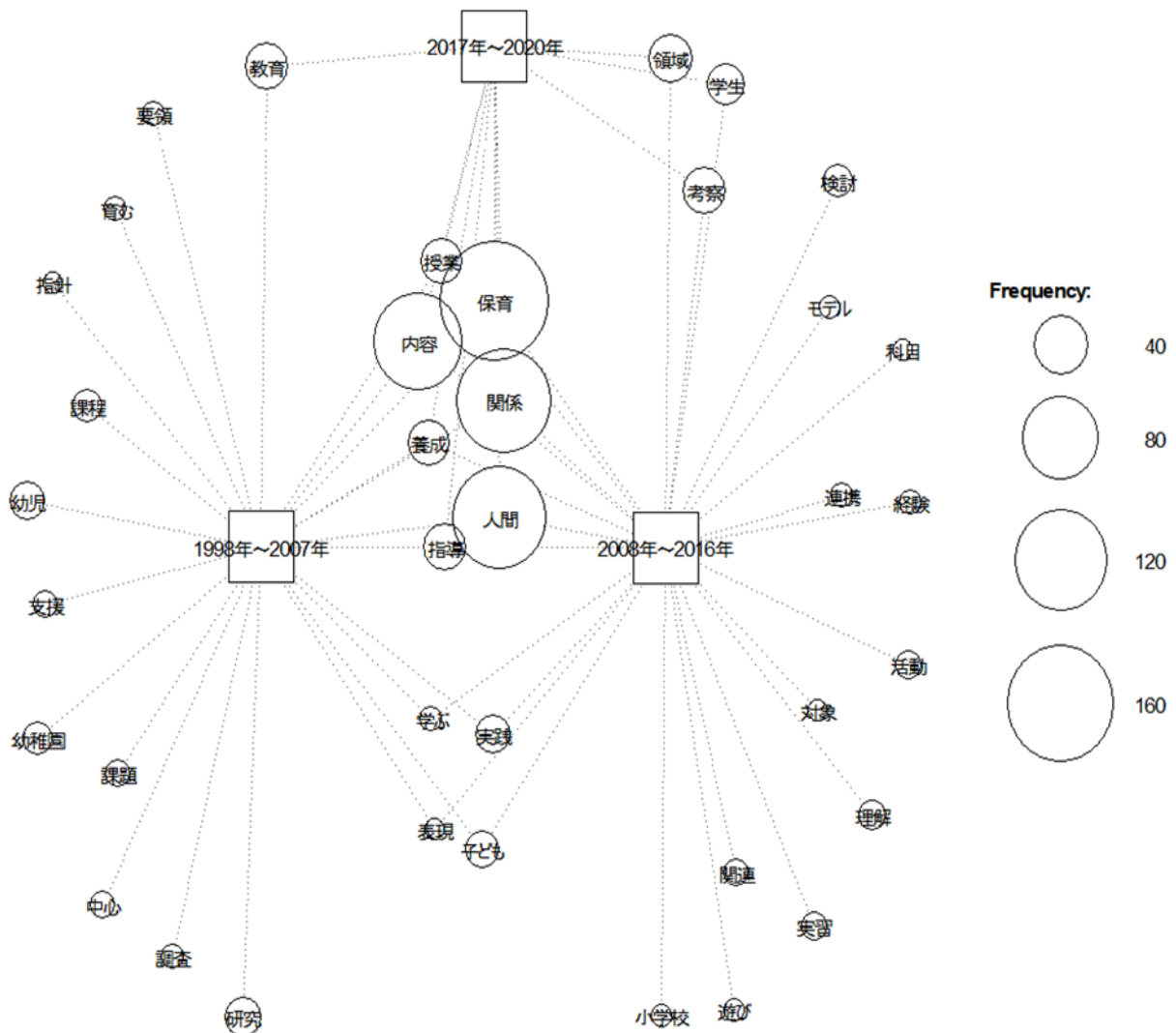


図2 保育内容「人間関係」の論文タイトルの年代別抽出語との共起ネットワーク

先述した永野（2007）によると1989年版の幼稚園教育要領で新たに設定された頃は、主として子どもの人間関係の変容、発達に関する研究と保育者の人間関係形成への援助、関わりに関する研究が中心であった。その流れを受け、1998年～2007年は、子どもが人との関わる力を育む上で、大きな役割や責任を担う保育者の資質向上や、実践報告がなされていた。特に、西山（2005）は、「人間関係」に特化した12項目の「人間関係」保育者効力感尺度を作成し、保育者の研鑽に資する有用なツールとした。その後も、この尺度を利用した保育者支援プログラムを実施し、その効果を検証していった（西山2011）。この時期、同様に、神蔵・小原（2007）も、「人間関係」を学ぶ基礎となるプログラムの開発を発表している。

2008年～2016年代も引き続き理論と実践力の融合を図る研究として、菊池（2008）や森田（2008）、大野（2013）らの研究がある。しかし、2008年度版の幼稚園教育要領には上述したような内容が増え、同年に改定された保育所保育指針には、幼稚園教育要領にはない「①安心できる保育士等との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、模倣して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする」「④外国人など、自分とは異なる文化を持った人に親しみを持つ」と内容がより細やかに示されている。このことを反映するかのようになり、保育者養成校の指導内容の検討が行われるようになった（高橋、2015・栗原、2016）。また、幼稚園も保育所も、子どもが安心して生活できる場の保障と一人一人の発達の道筋に沿った保育の充実や、小学校との積極的な連携も求められるようになり、伊勢（2015a,b）は、保育内容の人間関係と小学校の特別活動や生活科の指導内容との関連を明らかにしている。この流れはさらに、保幼小連携の教育課程への研究として田村ら（2018）や余公・大久保（2018）が発展させている。

そして、2017年～2020年の研究は、2019年の改訂を受け、保育内容「人間関係」を多様な観点から再考する研究、改訂を受けた養成校の指導をシラバスなどの枠組みから考察する研究、指導実践からの省察と、大きく3つの方向の研究が占めている。世界的な幼児教育への注目が高まる中、OECDをはじめ世界的に幼児期に育むべき力として認識が高まる「社会情動的スキル」の中で示された非認知能力を育む保育の観点から伊藤（2017）は、日本の保育は歴史的に「心情・意欲・態度」や保育内容「人間関係」の中で、いわゆる非認知能力を育むことを重視してきたものの、心の理論や他者感情理解、道徳性など現代の発達心理学に関連する科学的知見と実践知を繋ぐ視点が少なかった現状を踏まえ、実態を客観的に示すことの必要性を述べている。その反省を活かした研究例では、減少傾向にあった事例のエピソードを再度現象的子ども理解の観点から見直す研究として、小藪江（2020）や斎藤・田中（2020）の研究などが挙げられる。人間関係における「他者の反応を待つ」行為の意味を考えたり、子どもの自立に必要な促進要因としての「いさござ」の捉え直し、その場面において子どものサインを受け止め言語化を促す子どもと保育者の相互作用を意味づけたりと、保育者の存在の重要性が改めて明らかとなっている。また、山村（2019）は、保育内容「人間関係」を持続可能な開発のための教育（ESD）における「人と人とのつながり」「人と社会とのつながり」「人と環境とのつながり」という観点から、「つながり」の重要性と関連させた保育カリキュラムを考える必要性を訴えている。心理学の立場から、幼児期の発達におけるソーシャルスキルの重要性は実証されているが、幼児教育における位置づけが十分検討されていないとして、本田（2018）は、3法令の保育内容「人間関係」を用いて対応を検討し、心理学の研究者と保育者が協働して子どもの育ちを支えることに貢献できるとしている。

保育者養成校における保育内容「人間関係」のシラバスを分析する研究を金城（2017）や田中・岩治（2017）が追究し、これらの研究は、新たなシラバス作成の基準が示された場合の参考となるよう準備されたものと考えられる。2017年3月、一般社団法人保育教諭養成課程研究会による「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究」がまとめられ、幼稚園教諭の養成の在り方が提案された。これを受ける

形で、小林（2020）や赤坂（2020）などに代表される保育内容「人間関係」の授業実践の成果が、数多く報告されるようになっている。

おわりに

保育内容「人間関係」の研究動向を、CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキスト分析から探求してきたが、研究の方向は、保育者養成校において、より実践的で、学生にとって学びやすい授業の在り方を模索する時期に入ったと考えられる。

その中で、やはり今後は、具体的な現場の子どもの姿を捉えて見せ、そこに学生自身の体験や人間関係を関与・投影させながら、幼児の「人間関係」を指導・支援できる保育者となるための学びを進めることが、授業の望ましい方向であると言える。今後こうした知見を元に、さらに養成校の指導者が自らの授業実践を省察しつつ、限られた時間と枠組みの中で試行錯誤を重ね、実践知を研究成果として積み上げていくことが必要であろう。筆者もその一人として、今後さらなる授業改善を目指そうと考えている。

引用文献

- 赤坂澄香(2020), ICT 活用技術を備えた保育者の養成に向けて：保育内容「人間関係」における授業実践, 有明教育芸術短期大学紀要, 11, pp. 59-68.
- 畑野裕子 (2018), 子どもの「運動遊び」の研究動向と展望に関する一考察—CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて—. 教職課程・実習支援センター研究年報. 1. pp.151-162.
- 畑野裕子 (2019a), 「保育内容」の研究動向に関する一考察—CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて—. 神戸親和女子大学児童教育学研究. 38. pp.231-245.
- 畑野裕子・大竹留美・阪江豪 (2019b). 「保育実習指導」の研究動向に関する一考察—CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて—. 教職課程・実習支援センター研究年報. 2. pp.107-118.
- 畑野裕子・大竹留美 (2020). 保育内容「環境」の研究動向に関する一考察—CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて—. 神戸親和女子大学児童教育学研究. 39. pp.193-205.
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析；内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一 (2018) KHCoder (<http://khc.sourceforge.net/>)
最終アクセス 2019 年 11 月 1 日
- 本田真大 (2018), ソーシャルスキル教育の観点からの保育内容(人間関係)の内容分析, 北海道教育大学紀要教育科学編, 68(2), pp.65-74
- 伊勢正明 (2015), 小学校「特別活動」の内容と保育内容「人間関係」の指導に関する一考察:係活動・園行事に注目して, 帯広大谷短期大学紀要, 52(0), pp.63-70
- 伊勢正明・市原純 (2015), 現代の若者の姿と学生の経験した保育内容「人間関係」・生活科の指導内容, 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀, 2, pp.19-28
- 伊藤理絵 (2017), 「保育内容 人間関係」再考：非認知能力を育む保育の観点から, 名古屋女子大学紀要. 家政・自然編, 人文・社会編, 63, pp.285-297
- 一般社団法人保育教諭養成課程研究会 (2017), 平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質の保証を考える—, 文部科学省
- 神蔵幸子・小原幸子 (2007), 保育内容「人間関係」を学ぶ基礎としての関係体験プログラムの開発, 洗足論叢 35, pp.37-46.
- 菊地恵 (2008), 理論と実践力の結合による保育内容の指導法を目指して(2)保育実践における領域「環境」と他領域「健康」・「人間関係」とのかかわりより, 聖園学園短期大学研究紀要, 38, pp.61-70
- 金城悟 (2017), 保育者養成課程における「保育内容 (人間関係)」「幼児と人間関係」のシラバス構成にむけた基礎的研究 (1) 授業計画の分析, 東京家政大学教員養成教育推室年報, 4, pp.65-71.

- 小林美沙子 (2020), 領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討: 領域及び保育内容の指導法に関する科目(人間関係)の授業実践から, 島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報, 1, pp.32-41.
- 森田満理子(2008), 保育内容「人間関係」に関する研究: 4歳児の積み木遊びに焦点を当てて幼児が周囲とのかかわりを広げていく過程を捉える, 川口短大紀要こども学科篇, 22, pp. 135-151.
- 永野泉 (2007). 保育内容「人間関係」に関する研究の動向—日本保育学会の研究発表を中心に—. 淑徳短期大学研究紀要, 46, pp.33-42.
- 菜原 桂子(2016), 多様な保育内容と方法の理解を深める授業実践—人間関係から学び続ける保育者の養成を目指して, 北翔大学短期大学部研究紀要, 54, pp.129-136.
- 西山修 (2006), 幼児とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成, 保育学研究, 44 (2), pp.150-160.
- 西山修 (2011), 領域「人間関係」に関わる保育者支援プログラムの検討—保育者効力感について—, 幼年教育研究年報, 33, pp.89-96.
- 大野ひとみ (2013), 「保育内容」領域「人間関係」の実践的試み, 久留米信愛女学院短期大学研究紀要, 36, pp.75-82
- 小藺江幸子 (2020), 幼児の人間関係における「他者の反応を待つ」行為が持つ意味—集団と個の相互作用の観点からのアプローチ—, 淑徳大学短期大学部研究紀要, 62, pp.73-80.
- 斎藤友子・田中洋 (2020), 幼児期における「自立心」の形成に関する実践事例の検討—大分大学教育学部附属幼稚園の実践事例を通して—, 大分大学教育学部研究紀要, 41 (2), pp.193-204.
- 高橋さおり・清水桂子 (2015), 保育内容の総合的な理解を目指した保育者養成の検討: 「保育原理」と「保育内容人間関係」の科目間連携を通して, 北翔大学短期大学部研究紀要, 53, pp.89-95.
- 田村美由紀・佐藤純子・矢治 夕起 (2018), 保育内容(人間関係・環境)と小学校生活科における幼保小の連携と接続, 淑徳大学短期大学部研究紀要, 58, pp. 57-67
- 田中卓也・岩治まどか (2017), 保育者養成における講義のシラバス分析とその課題に関する考察—保育内容(人間関係)を中心に—, 共栄大学教育学部研究紀要, 1, pp.49-59.
- 山村けい子 (2019), 保育内容「人間関係」: 持続可能な開発のための教育(ESD)の観点から, 兵庫大学短期大学部研究集録, 54, pp.9-18
- 余公裕次・大久保淳子(2018), 幼保小連携に係る教育課程の検討: 保育内容「人間関係」と小学校「生活科」「道徳科」「特別活動」との関連を中心に, 九州竜谷短期大学紀要, 64, pp.23-40.